

2022年7月10日

人の思いと神の思い

ヨハネによる福音書 7：40～52

・この箇所を持っている位置

今日の説教の準備のために開いたある本に、こんな趣旨の言葉がありました。この箇所が持っている意味について、あまり重要と考えていないのではないか、と。それは、ここには、イエス様が出てくるわけではありません。そして、イエス様が語られた言葉があるということでもありません。イエス様は、一切登場しないのです。むしろ、イエス様の言葉を聞いた人たちの中に、一体何か起こったのかが示されているのです。そうすると、イエス様の姿が直接示されている、または、イエス様の言葉がそのまま記されている箇所と比べれば、重要性が低いように思ってしまうのではないかと、ということなのです。

勿論、私たちは、イエス様が登場している他の箇所に比べて、この箇所の価値が低いとは思っていないと思います。この箇所も、聖書に残されている以上、私たちに対して、大切なことを伝えていることは間違いないことなのです。しかし、この箇所の言葉を通して、神様が私たちに何を伝えようとしているのかということは、決して自明のことではないと思うのです。説教の準備を通して、私自身、そのことを考えさせられたのです。そして、考えていまして、こうではないかと思わされたことがありました。確かに、ここに記されているのは、イエス様の言葉を受けた人間の反応の姿です。しかし、その姿を通して、イエス様が語られた言葉の持っている意味が明らかにされていると思いました。例えて言えば、黒色を持ってくることで、白色が分かるというようなことだと思うのです。

今日は、示されているヨハネ 7：40～52 の言葉を辿ることを通して、イエス様の言葉の前に立たされた人々の姿から、イエス様が語られた言葉の深い意味を受け止めていきたいと思います。

・人々の中に起こった思い

まず、40 節にこうあります。「この言葉を聞いて」、「この言葉」とあります。それは、この直前、先週共に読みました「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」という言葉です。先週も触れましたが、この言葉の全てを、人々が理解したわけではなかったと思います。しかし、この言葉は、ある力を持って、聞いた人々に迫ることになりました。勿論、「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」というイエス様の言葉だけではなく、これまでのイエス様のお働き、

言葉、それらを含めてということだと思いますが、このイエス様をどう受け止めるかということで、群衆の間に大きな対立が起こったということなのです。群衆が二つに分かれてしまったということなのです。

「この人は、本当にあの預言者だ」と言う者や、「この人はメシアだ」と言う者も現れたとされています。ここでの「あの預言者」は、具体的な預言者を指している言葉です。旧約聖書申命記に、「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。(申命記 18 章 18 節)」と、神様がモーセに語られた言葉がありました。それで、神の民イスラエルは、神様が定められた時、自分たちの許へモーセの再来である預言者が遣わされるという希望を持っていました。それである人たちは、イエス様は申命記で言われている預言者、つまり、モーセの再来であると思ったのです。先週も触れましたが、今祝われている祭りにおいて、荒れ野を旅した民が、モーセを通して水を得たことを記念していたのです。水を得るためにモーセが働きをなした、そのことをみんなが心に思い浮かべている時に、イエス様が「渴いている者はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」と言われたのです。それだから、この方こそが、真の水を与えてくださる、あのモーセの再来であると思った人たちがいたということなのです。イエス様を、神様がお遣わしになった特別な存在と受け止めたのです。

更に「この人はメシア」と受け止めた人たちもいました。メシアとは救い主、新約聖書で書かれた言葉で言えば「キリスト」なのです。この救い主は、神様が苦境の中を歩む神の民イスラエルのために、「救い主を遣わす」と繰り返し約束されました。その約束の救い主ということなのです。このイエス様において、神様が約束を実現された、イエス様の言葉を聞き、イエス様の働きを見る時に、そう受け止めさせられたということなのです。

一方で、イエス様が救い主であるということは有り得ないと強く思っている人たちがいました。その人たちは、神様のことを全く考えないでそのように考えていた、ということではなかったのです。そう思っている人たちには、そう思うに足る理由があったのです。それは、イエス様がガリラヤ出身であるということでした。救い主が神様によって遣わされる、その約束を告げている預言者の言葉に、その救い主が「偉大な王ダビデの出身地であるベツレヘムから出る」と繰り返し告げていたからです。例えば、こういう言葉です。「エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中いと小さき者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る。(ミカ書 5 章 1 節)」、クリスマスの時に繰り返し読まれる箇所です。この言葉のように、神様は救い主をお遣わしになる、その方は、ベツレヘムから出ると言われていたのです。それ

に対して、イエス様は、当時辺境とされたガリラヤの出身なのです。そのことを多くの人は知っていました。出身のことで言えば、神様の約束の言葉と全く異なっている、だから、この者は救い主ではありえないと思っていたのです。それが、もう一方の人たちの思いなのです。

・何が分けることになったのか

こうして、群衆の中にイエス様をどう受け止めるかと言うことで、対立が起こってしまっているのです。更に、その対立が人々との間に起こっているだけではないのです。当時の宗教的な指導者たちの間にも起こってしまうのです。

祭司長やファリサイ派の人たちから派遣されて、イエス様を逮捕しようとした下役たちは、イエス様を逮捕することなく、戻ってきたのです。その姿を見た時に、祭司長やファリサイ派の人たち、つまり、当時の宗教的な指導者たちは、とても苛立ったのです。そして、下役たちに聞くのです。「どうして、あの男を連れて来なかったのか」と。それに対して、下役たちは「今まで、あの人のように話した人はいません」と答えています。下役たちは驚いたのです。イエス様のように話す人はいなかったからです。それで、結局逮捕することは出来なかったということなのです。

それに対して、派遣した人たちは言うのです。「お前たちも惑わされたのか。議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか。だが、律法を知らないこの群衆は呪われている。」と。イエスを信じている者は惑わされている、そういう理解なのです。ここで、「律法を知らない」とありますが、これは、私たちの感覚で言えば、旧約聖書のことです。祭司長やファリサイ派の人たちは、結局騙されていると思っています。そして、騙されてしまっている理由もはっきりしている。それは、聖書を知らないからだ、と思っているのです。だから、聖書をちゃんと理解している議員やファリサイ派の人たちの中で、惑わされている人はいないではないか、聖書を知らないからあのようなイエスを救い主と思い込んでしまうのだ、と強く批判しているのです。これは、先ほど見ましたように、「救い主がベツレヘムから出る」という聖書の言葉が根拠になっているのです。そうして、聖書のことを分かっている、そう思っている所で、イエス様を救い主と受け入れようとしている人たちを、強く批判しているのです。

・私たちへの問いかけとして

勿論、私たちは、イエス様の誕生の本当の姿を知っていますから、イエス様が単にガリラヤの出身と言うことではなく、ベツレヘムにお生まれになったことを知っています。ですから、この祭司長やファリサイ派の人たちが持っていた前提が、そもそも誤っていたということを知っているのです。そういう意味で、事実関係をきちんと

知らないで誤った主張をするなんて、こんなことでよいのだろうか、批判をすることはとても簡単です。しかし、説教の準備をしながら、強く思わされたことがありました。それは、私たち人間は、簡単に祭司長やファリサイ派の人たちが、この時いる場所に立ってしまうのではないか、ということです。

そう思ったのには、ある理由がありました。ここで福音書を記したヨハネは、イエスを救い主をして受け取った人たちは、イエスの本当の出生地がベツレヘムであることを知っていたから、イエスを救い主として受け入れることが出来たということは、全く記していないのです。出生地がベツレヘムであるか、ガリラヤであるか、それが問題ではないということなのです。旧約聖書の言葉とどれくらい符合しているのか、それがイエスを救い主として受け入れるかどうかを決定づけるものではない、そのことが示されているように思うのです。

祭司長やファリサイ派の人たちは、どうしてイエスを受け入れることが出来なかったのか。それは、自分たちは、分かっていると思っている前提があったからです。預言者たちが、ベツレヘムから生まれると書いてある、そのことを十分に分かっている。そこから見れば、イエスはガリラヤの出身、だから、救い主で有り得ない。もうそれは十分に分かっている。そこで、結局大切なことを見失って知っていたのです。それは、個々の言葉以上に、聖書全体を通して神様が何を伝えようとしているのかと言うことです。それは「あなたを愛する」と言うことです。そのもっとも大切なものを見失っていたのです。そうして、木を見て森を見ずという状態に陥ってしまっていたのです。しかも、自分はちゃんと分かっているという前提です。

私たちは、神様の言葉を全て分かっているとは、決して思っていないと思います。しかし、神様はこう思っていると思い込んでいるということは、しばしばあるのではないかと思います。例えば、「神様は自分のような者を喜んでおられないのではないか」という言葉をお聞きすることが、しばしばあります。確かに、自分で自分の姿を見る時に、欠けた部分や問題が多く見えてきますから、もっとちゃんとした人を神様が喜ばれるはず、自分はおこぼれで何とか救いに与っているのではないか、そう思うこともあるのではないかと思います。しかし、神様の御心は全く違うのです。私たちを愛し導こうとされている、それこそが御心です。そういう私たち人間の思いと神様の思いのずれがあるのではないかと思います。そのことが、今日の箇所には非常にはっきりと示されているように思います。

• どこに救いの道を見るのか

祭司長やファリサイ派の人たちは、惑わされていると思っていました。しかし、群衆たちの少なくない人たち、そして、下役がイエスを救い主として受け入れ始めて

いました。更に、彼らと同じ指導者の一人であるニコデモも言うのです。「本人から事情を聴くべき、そうでなければ簡単に結論を出せない、律法にそう定められている」と言います。そうして、イエス様を救い主と受け止めるのは間違いと、簡単に断罪すべきではないと言ったのです。勿論、彼は、ヨハネ福音書 3 章にありますように、夜イエス様の所を訪ね、直接イエス様の話聞いていたのです。そして、議員の一人でありながら、イエス様を救い主であると受け入れていたのです。そういう人も、実際にいたのです。

祭司長やファリサイ派の人たちは、イエス様を受け入れることが出来ませんでした。それは、彼らが、神様の言葉をちゃんと分かっていると思い込んでいるその思いが、イエス様を受け入れることを阻んでしまったということを示しました。では、群衆のある人たちは、下役たちは、そして、ニコデモは、どうしてイエス様を受け入れるという道に進むことが出来たのでしょうか。そのことを受け止めるために大切なのか、下役たちが言ったこの言葉だと思えます。「今まで、あの人のように話した人はいません。」と。

下役たちが、イエス様を逮捕するように命じられて、遣わされたにもかかわらず、どうして逮捕しないで帰ってくるようになったのか。その理由は、イエス様の言葉を聞いたからなのです。それも、祭司長やファリサイ派の人たちのように、自分は分かっている査定してやろうという思いではなく、率直に聞くということなのです。その時、イエス様の言葉に、救い主としての言葉を見たのだと思えます。彼らは、祭司長やファリサイ派の人たちの許で働いていました。それで、神様について、説明する言葉は多く聞く機会があったと思えます。しかし、イエス様は神様について説明をされたわけではありませんでした。「私の許にこそ救いがある、だから、私の許へ来なさい」と語られたのです。

ニコデモもそうです。神様の救いに与っているという実感がなかなか持てなかった彼に、イエス様はそんな不信仰では駄目だと言われるのではなく、「霊によって新しく生まれさせられる」と言うことをお示しになりました。そうして、ニコデモは神様の救いの恵みに立って歩む所へと導かれていくことになりました。それが、ニコデモがイエス様の言葉によって与えられた歩みでした。だからこそ、ニコデモは言うのです。「本人から事情を聴き…」、何よりイエス様の言葉に聞いてほしいということなのです。その上で判断してほしい、と。

このニコデモの思いは、彼の想像もしない形で実現しました。イエス様の裁判の場面で、多くの指導者たちがイエス様の声を聞くことになりました。しかし、多くの祭司長やファリサイ派の人たちは、イエス様の声に背を向けることになったのです。結

局、自分が分かっているという所から離れることが出来ませんでした。その時、最も大切なこと、神様が一体何を自分にお伝えになっているのか、それを受け取ることが出来なかったのです。その姿を受け止めさせられるのです。こうして、イエス様の言葉は、大きな波紋を起こすことになりました。イエス様の言葉を聞いた人たちを、二つに分けていくことになったのです。受け入れるか受け入れないかです。

・神様の恵みに出会う道として

私たちは、自分の姿を振り返ってみますと、イエス様の声を本当にちゃんと聞いているだろうかと思えます。聞いていないのではないか、もしくは聞き流しているのではないか、そういう意味で、私たちも問われる思いがします。しかし、ここには、私たちが一体どこでそれを乗り越えるか、明確に示されているのです。それは、結局、イエス様の言葉の前に立つ、それも分かっているという前提ではなく、本当は分かっていない、だからこそ聞かせていただくとの思いを持ちつつ、イエス様の前に立つことです。その時、イエス様の言葉、新しい輝きを持って、私たちに神様の恵みを新しく示していくのです。「その人の内から生ける水が川となって流れ出るようになる」、このイエス様の言葉が実現するのです。

そして、イエス様の言葉によって新しくされる、その大切な入口は、ニコデモが「本当に救われているのか」との思いを抱えてイエス様の前に立ったことに示されています。自らの疑問を抱えたまま、イエス様の言葉に聞くのです。そうして、イエス様の言葉に聞く時に、救いとは自分の力で得るものではなく、神様から恵みによって与えられるものである。その恵みが明確に示されるのです。

私たちも、信仰の旅路の中で、心に様々な思いが浮かぶのです。時には、本当に自分は救いに与っているのか、神様に支えられているのか、更に言えば、本当に自分は神様を信じているのだろうか、分からなくなる時があるのです。そういう思い、そういう疑いを持つことは、あってはならないことではありません。むしろ、私たちにとって、とても本当に大切なことなのです。そして、その思いを持ったまま、イエス様の前へ立ち、イエス様の言葉に聞くのです。その時、私たちが分かっているつもりでいた神様の恵みを、更に深く、更に豊かに知らされていくのです。そこへとイエス様の言葉は私たちを導くのです。

私にも、ニコデモと同じような経験があります。洗礼を受けて、しばらく経った頃、救いが分からなくなり、自分は本当に神様を信じているのか、分からなくなっていました。何か、深い霧が立ち込めた道に迷い込んでしまったように感じました。その時、一つの言葉と出会いました。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように

と、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、あなたがたを任命したのである。(ヨハネによる福音書 15 章 16 節)」と。この言葉を通して、受け止めさせられました。それは、私が何かをするのではない、神様が私を選んで愛してくださっている。そこから全てが始まっていると、受け止めさせられたのです。そして、立ち込めていた霧が晴れたような思いがしたのです。それで、全てが分かったわけではもちろんありません。いつも問われながら、時には道を見失いそうになりながら、歩いていくことに変わりはないのです。しかし、一つの大切な道標になったのです。自分の心からの問いに、イエス様は言葉によって必ず答えを与えてくださるということです。そのことへの期待をもって、歩むことができると思うようになったのです。

今日の聖書箇所には、イエス様が直接出てきません。しかし、この箇所を通してイエス様の言葉に聞く恵み、そこへと招かれた人たちの詩型が示されています。そして、私たちもまた、招かれています。イエス様の言葉を聞いて生きる幸いの道へ、です。感謝をもって、その招きに応え、イエス様の言葉を聞き歩む、その信仰の道を共に歩いていきたいと、心より願います。